Exhibition From "HOMAM"2008
ー我が家で展覧会を開きますー

建物と歴史、エミリーとダンカンの人柄をひもとかなければ、本展の意味は語れません。静岡市駿河区高松の海岸沿いに建つ白い壁が美しい洋館旧マッケンジー邸は、戦前に建てられた洋風住宅の中で、W.M.ヴォーリーズ設計の建築物として県内唯一現存する大変貴重な建物です。平成9年12月12日登録有形文化財に登録。貿易商社A.P.アーウィン商会の日本支社勤務になった、ダンカン・J・マッケンジー夫妻の住宅として建てられました。

マッケンジー夫妻は、日米開戦のため一時帰国しましたが、戦後再び来日し、静岡県特産の茶の輸出振興に尽力しました。ダンカン氏は、1951年（昭和26年）に他界しましたが、エミリー夫人は静岡に留まり社会福祉の向上に貢献し、1959年（昭和34年）に静岡市の名誉市民第1号に選ばれました。その後、1972年（昭和47年）に夫人は帰国することなり、建物は静岡市に寄贈されました。

エミリーとダンカンは、富士山の見えるこの地を愛し、家族を愛し、そこに暮らす人々を愛し、人間が生活するうえで基盤となる邸宅「家」をここに構えました。建築としてもすばらしいその「家」に、夫妻は相手の立場を思いやる優しい気持ちをしみ込ませてくれました。そして、日本の美術品収集と夜空を眺める天体観測を趣味とし、邸宅にペガサス座のβ星"HOMAM"（「勇者の幸福な星」）の愛称をつけました。

一昨年本邸宅を会場とした、本格的な現代美術展Exhibition From "HOMAM"2007が開催されました。本展はその二回目の展覧会です。出品作家の9名は昨年も出品、新たに3名が出品し12名の現代美術作家の展覧会となりました。いずれも、旧マッケンジー邸を知り尽くした静岡ゆかりの現代美術作家たちです。美術作家たちは何度もこの家を訪れ、場所との対話を繰り返してきました。その対話の内容が作品化される大変興味深い展覧会です。文化財を守りながら、その場所の持つ歴史や性格を再考する美術作家たちの空想と創造は、静かな風を旧マッケンジー邸にそっと吹き込みました。

現代の美術表現の有り様は、上下左右に伸縮を繰り返し常に動いています。現代社会において、美術の役割は、デベロッパー（開発業者）であってはならないと思っています。あくまでも、一貫性のある思想と責任ある行動の個人的な動きが重要で、その人間性に係ることが多いのです。美術作家一人一人がどう生き抜いていくかを垣間みることができる美術こそ、国家や社会の権威に対して個人の権利と自由を尊重する、個人主義の代名詞なのかもしれません。その上で、表現活動を実践して生きている美術作家がいることその事実が、美術の役割なのかも知れません。かつて、ボイスは「芸術は変化の可能性のための可能性」と言っています。まさに現代の美術の動向を20年前に示唆しています。

作品の見方については、明確な解答も必要なこともあるかもしれません。しかし、美術作家の作品は作家の生き方そのものの具体的な現れである以上、普遍的で誰もが納得のいく答えを出すことは無理なのかもしれません。つまり、個人主義の上にたった他人の生き方だからなのです。当然、観る側の人々も同じであればすばらしいことで、そこから生まれる対話は文化水準の高いコミュニケーションとなるでしょう。

美術作家の特性として、創造力や発想力に長けているところがあります。特に本展では、気負いがない美術作家たちの制作姿勢に好感が持てました。それと同時に、本展の作品群には共通した優しさを感じます。建物に対する愛着なのか、場所（sense of places）を読み取る力なのか、建築の構造や場所の持つ空気なのか、さらには過ぎ去った歴史なのか、美術作家たちが、そこにそっと美術という手法で手を加えることで、観るものは時空を超えた魔法を掛けられて、家の中を散歩しているかのような錯覚に陥ってしまいます。家主の人を愛した想いや気配すら感じることができました。

本展には、もう一つの大きな試みがありました。静岡市民の文化遺産である旧マッケンジー邸（登録有形文化財）を管理する市と、地域と大学の積極的な連携体制を作り、この地域でしか創造することのできない高い水準の文化芸術活動を行い、創造の発信や交流の活性化を図り地域の文化水準の向上を目的としたことでした。連携を試みたのは、文化財を管理する「静岡市」、文化事業を担当する「静岡市文化財団」、芸術専門分野の知や人的活力およびネットワークを導入する「常葉学園大学造形学部」です。事業は、文化庁の助成を受けて実施しました。

結果、静岡ゆかりの現代作家による現代美術を通して、地域財産の再発見や再認識を促進できたことや、展覧会開催の集客効果により、地域文化遺産の存在を広く周知するとともに、近代文化遺産の先駆的活用事例を提示しました。また、アーティストたちとそこに暮らす人々との積極的で有意義な交流を図ることができました。

最後に、本展にご協力いただいた多くの方々に、この場をお借りして熱くお礼を申し上げます。旧マッケンジー邸で起こった美術の出来事の証しとして、本編をここにまとめます。

美術家、アートプロジェクト"HOMAM"2008実行委員会委員長、常葉学園大学准教授
蜂谷充志